

令和元年6月19日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02624

研究課題名(和文) 中断節の語用論的機能に関する通言語的対照研究：連体・準体節と連用節の対比を中心に

研究課題名(英文) A cross-linguistic study of the pragmatic functions of suspended clauses: With special attention to the contrast between attributive/nominalized clauses and adverbial clauses

研究代表者

堀江 薫 (Horie, Kaoru)

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：70181526

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本語学・日本語教育で伝統的に「言いさし」と呼ばれてきた、従属節が単独で主節として用いられ、特定の語用論的機能を獲得した「中断節」という構造を言語類型論、対照言語学の観点から通言語的に分析した研究である。本研究では、特に日本語、韓国語、等のアジア言語、英語、フィンランド語等のヨーロッパ言語の中断節の機能を分析した。本研究で探求した中心的な研究課題は、「連体・準体」と「連用」という、「名詞」的な構造対「述語(特に動詞)」的な構造の区別を援用し、「中断節」の中で「連体・準体」タイプと、「連用」タイプの間でどのような語用論的な違いがあるかを明らかにすることであった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの日本語学・日本語教育、また言語類型論分野においては、副詞節由来の「連用」タイプの中断節(例：～ば、～から、～けど、if, because等で終結する節)に研究の焦点が置かれていたが、本課題によって、特に日本語や韓国語において種類が多く、使用頻度も高い「連体・準体」タイプ(例：～こと、～わけ、～のといった形式名詞・準体助詞あるいは語彙的な名詞を主要部とする独立連体修飾節)が非常に重要な語用論的な機能を担っていることが明らかになった。その結果、「連用」タイプと「連体・準体」タイプの中断節の語用論的な機能の相違も明らかになり、中断節のタイポロジーの再構成に貢献することができた。

研究成果の概要(英文)：This study is a cross-linguistic study of "suspended clauses", i.e. subordinate clauses which have come to be used as main clauses and have acquired specific pragmatic functions, which have been traditionally referred to as "iisasi" in Japanese linguistics and Japanese pedagogy. This study pays particular attention to suspended clauses in Asian languages like Japanese and Korean and in European languages like English and Finnish. The main objective of this study was to explore pragmatic differences (if any) between suspended clauses derived from noun modification/nominalization and those derived from adverbial clauses.

研究分野：言語類型論

キーワード：中断節 非従属化 語用論的機能 言いさし 連体節 準体節 副詞節 文化化

1 研究開始当初の背景

日本語において「早く行ったら。」「知らないけど。」といった従属節が主節として単独で用いられ、独自の語用論的機能を帯びるに至った構造を、日本語学・日本語教育学において「言いさし」と称し、近年は言語類型論の分野で「非従属化(*insubordination*)」として知られるようになってきている (Evans 2007)。

このような構造は、日本語学や日本語教育学において記述的、教育的な観点から分析されることはあったが、その関心は日本語内部にとどまり (例: 白川 2009)、同種の現象が日本語以外でどのような広がりを持っているのか、その構造と機能において言語間でどのような共通点と相違点が見られるか、といった問題意識をもって「言いさし」現象を考究する研究は従来殆どなかった。近年、言語類型論、語用論、文法化研究といった複数の分野で、「言いさし」現象の通言語的研究が少しずつ行われるようになってきているがまだ日本語の「言いさし」研究と他言語、通言語的研究との間には十分な相互交流が行われているとは言い難い状況であった。

2. 研究の目的

このような背景を踏まえ、本研究は、日本語の「言いさし」研究と、「言いさし」現象の対照・通言語的研究の有意義な相互交流を目指して構想された。具体的には、本研究では、いわゆる「従属節」が文法化のプロセスを経て、特定の語用論的機能を有するに至った「主節」的な構造を「中断節(*suspended clauses*)」と呼ぶこととした。その上で、言語類型論と対照言語学、語用論を複合させた観点から、特に日本語、韓国語、インドネシア語等のアジア言語、英語、フランス語、フィンランド語等のヨーロッパ言語の中断節の機能を分析することを企図した。本研究の中心的な研究課題は、日本語学において用いられている「連体・準体」と「連用」という、「名詞」的な構造対「述語 (特に動詞)」的な構造の区別を援用し、「中断節」の中で「連体・準体」タイプと、「連用」タイプの間でどのような語用論的な違いがあるかを明らかにすることであった。

これまでの日本語学、日本語教育、そして通言語的、対照言語学的研究においても中心的に取り上げられるのは、いわゆる「副詞節」を起源とする「連用」タイプの中断節であった。これに対して、本研究では、日本語や韓国語において顕著に発達しており、東アジア言語や東南アジア言語においても頻繁に観察される、いわゆる名詞化 (体言化) を基盤とした「名詞補文節」を起源とする「準体」タイプの中断節や、日本語において特殊な文体的効果を伴って宣伝広告などのジャンルや小説などにおいて用いられる、語彙的主要部と修飾節からなる、独立「連体修飾節」(関係節) タイプの中断節も対象に含めることで、従来の「中断節」(言いさし) 研究の対象を大きく拡張することを目指した。

3. 研究の方法

本研究では、言語類型論において用いられている通言語的な文法形式の分析手法を対照語用論や文法化研究、歴史語用論において用いられている文脈内の語用論的機能の分析手法を援用した。

具体的には、対象とする言語 (例: 日本語、韓国語) において、「連体」「準体」「連用」タイプの中断節にはどのような具体的な構文があるかを列挙していき、インベントリーを作成し、それぞれの構文の構造、語用論的機能をコーパスの実例の分析を通じて明らかにし、言語ごとに、「連体」「準体」「連用」タイプの中断節にはどのようなものがあるかを概観した。この方法により、従来の「言いさし」研究では取り上げられることがなかった、特に「連体」「準体」タイプの中断節に光が当てられることになった。

また、通時的な言語資料が整備されている言語 (日韓語) においては、文法化や歴史語用論の観点から、「連体」「準体」「連用」タイプの中断節がどのようなプロセスを経て特定の語用論的機能を担う構文として確立するかも検討することができた。

4. 研究成果

本研究の重要な成果は、これまでの日本語学・日本語教育、また言語類型論分野においては、専ら「連用」タイプの中断節 (例: ~ば、~から、~けど、*if*, *because* 等で終結する節) に置かれていた研究の焦点を、従来あまり「中断節」研究において着目されなかった「連体」「連用」タイプへと拡張した点にある。

特に日本語や韓国語において種類が多く、使用頻度も高い「連体・準体」タイプ (例: ~こと、~わけ、~のといった形式名詞・準体助詞あるいは語彙的な名詞を主要部とする独立

連体修飾節)が非常に重要な語用論的な機能を担っていることが明らかになり、「中断節」のタイポロジーの再構成、再検討に大きく寄与することができた。おりしも「連体」「準体」構造に関しては、近年柴谷方良氏によった「体言化(nominalization)」という通言語的現象の理論的な位置づけの根源的な見直しが進行中であり、本研究で着目した「連体」「準体」構造を起源とする「中断節」はそのような理論言語学の進展に照らしても非常に注目すべき現象であると言える。

また、本研究によって、アジア言語の中でも日本語や韓国語のように相対的に豊かな中断節のインベントリーを有する言語がある一方で、中国語のように中断節そのものの種類が限定されている言語があることも明らかになった。この違いは語順、特に述語の位置(SOV)と関わっていることも示唆された。一方で、ヨーロッパ言語は英語のように中断節がかなり限定されている言語もある反面、スペイン語やフランス語のような言語ではより種類が多く見られ、フィンランド語のように、ある点では日本語のように「連体」「準体」「連用」すべてのタイプの中断節の存在することも改めて確認され、中断節の通言語的バリエーションと日本語の位置づけも明らかになった。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計15件)

- 1) 堀江薫(2019)「文構造の中核と周辺における準体構造と連用構造の機能分担と競合」*KLS Selected Papers 1*, 226-236. (査読なし)
- 2) クロヤン・ルイザ・堀江薫(2019)「アルメニア語の非定形名詞修飾表現の時制解釈 日本語との対照を通して」*KLS Selected Papers 1*, 49-60. (査読有)
- 3) Horie, Kaoru (2018) “Linguistic Typology and the Japanese language In: Hasegawa, Yoko (ed.), *The Cambridge Handbook of Japanese Linguistics*.” Cambridge: Cambridge University Press, 65-86. (査読有)
- 4) Horie, Kaoru (2018) “Subordination and insubordination in Japanese from a crosslinguistic perspective. In: Handbook of Japanese Contrastive Linguistics. Berlin: Walter de Gruyter, 45-57. (DOI 10.1515/9781614514077-026) (査読有)
- 5) Zhu, Bing, and Kaoru Horie (2018) “The development of the Chinese scalar additive coordinators derived from prohibitives: A constructionist perspective.” In: Hancil, Sylvie et al. (eds.), *New Trends on Grammaticalization and Language Change*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins, 361-380. (DOI.org.10.1075/slcs.202.15zhu) (査読有)
- 6) Hotta, Tomoko, and Kaoru Horie (2018) “L2 acquisition of the Japanese verbal hedge *omou*: A prototype approach.” In: Masuda, Kyoko (ed.), *Cognitive Linguistics and Japanese Pedagogy: A Usage-based Approach to Language Learning and Instruction*. Berlin: Walter de Gruyter, 199-213. (査読有)
- 7) 高橋暦・堀江薫(2018)「<実現>を表す視覚動詞「みる」の構文化」山梨正明他(編)『認知言語学論考14』ひつじ書房, 117-154. (査読なし)
- 8) 胡蘇紅・堀江薫(2018)「話し言葉の文末における「が」「けど」の談話機能—認知・機能的観点から—」『認知言語学会論文集18』, 419-430. (査読なし)
- 9) Horie, Kaoru (2017) “The attributive versus final distinction and the manifestation of “main clause phenomena” in Japanese and Korean noun modifying clause constructions.” In: Matsumoto, Yoshiko et al. (eds.), *Noun-Modifying Clause Constructions in the Languages of Eurasia: Rethinking Geographical and Theoretical Boundaries*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins, 45-57. (DOI 10.1075/tsl.116.03hor) (査読有)
- 10) Horie, Kaoru, and Hyeryeon, An (2017) “Differential degrees of retention of lexical meaning in Japanese and Korean lexical categories.” In: Funakoshi, Kenshi et al. (eds.), *Japanese/Korean*

Linguistics 24. Stanford, CA: CSLI., 3-22. (査読なし)

- 11) Hamilitsch, Nathan, and Kaoru Horie (2017) “Construction grammar and frame semantics meet morphological borrowing: A case study of the borrowed bound morpheme *jakku* in Japanese.” *Proceedings of Kansai Linguistic Society (KLS)* 37, 133-144. (査読なし)
- 12) 堀江薫・堀江薫(2017) 「日本語・台湾華語・韓国語の「類似性形式」の文末用法 - 機能拡張の観点から - 」『認知言語学会論文集 17』, 146-158. (査読なし)
- 13) 堀江薫(2017) 「書評論文『語用論の基礎を理解する』(Gunter Senft (著), 石崎唯人・野呂幾久子(訳))」『語用論研究 19』(日本語用論学会), 100-105. (査読なし)
- 14) 堀江薫(2016) 「対照語用論」加藤重弘・滝浦真人(編)『語用論研究法ハンドブック』ひつじ書房, 133-157. (査読あり)
- 15) 朱冰・堀江薫(2016) 「束縛的モダリティと必要条件文の関連 —中国語・日本語・韓国語の対照を通して—」『言葉と文化 18』(名古屋大学大学院国際言語文化研究科), 33-44. (査読なし)

[学会発表](計 21 件)

- 1) 堀江薫 (2019) 「従属化と脱従属化における語用論的推論 - 日韓語と他言語の事例に基づいて - 」シンポジウム「日韓両語の「省略」は何を語るか—言語の個別性と普遍性に向けて— (招待講演) 東京大学駒場キャンパス, 3 月
- 2) 黄祺佳・堀江薫 (2019) 「知識状態から見る中国語文末詞「的」の文法機能 - 日本語の「の(だ)」との比較を通して—」言語処理学会第 25 回年次大会, 名古屋大学東山キャンパス, 3 月
- 3) Kim, Yewon, and Kaoru Horie (2018) “From manner to pseudo-quotation: The grammaticalization of Korean *sik* (‘style, manner’) and Japanese *fuu* (‘wind, manner’).” The 26th Japanese/Korean Linguistics Conference, University of California, Los Angeles, 11 月
- 4) Chiang, Chun- Hsien and Kaoru, Horie (2018) “Insubordinated conditional clauses in Spoken Chinese: A functional typological analysis.” The 17th International Conference on the Processing of East Asian Languages and the 9th Conference on Language, Discourse, and Cognition(ICPEAL 17 & CLDC 9), National Taiwan University, 10 月
- 5) 金納 愛・堀江薫 (2018) 「韓国語依存名詞「*sik*」の類似引用的な機能-話者の否定的評価的態度の観点から」第 19 回日本認知言語学会大会, 静岡大学浜松キャンパス, 9 月
- 6) クロヤン・ルイザ・堀江薫(2018) 「アルメニア語の不定形動詞による名詞修飾表現の成立に関わる語用論的要因 — 日本語との対照を通して—」第 19 回日本認知言語学会大会, 静岡大学浜松キャンパス, 9 月
- 7) Horie, Kaoru (2018) “Functional Utility of Noun Modification and Nominalization relative to Renyoo Syuusyoku (Adverbial modification): A comparative study.” (招待講演), San Francisco State University, San Francisco, CA, USA, 3 月
- 8) 胡蘇紅・堀江薫(2018) 「依頼と断りの相互行為における「けど」の言いさし表現 - 発話行為連鎖の観点から - 」社会言語科学会第 41 回大会, 東洋大学, 東京都, 3 月
- 9) 堀江薫(2017) 「『内の関係』と『外の関係』のマーキングに関する言語間のバリエーション: クメール語と日本語の対比を中心に」(招待講演) NINJAL シンポジウム「日本語の名詞周辺の文法現象 —名詞修飾表現ととりたて表現—」国立国語研究所, 立川市, 2 月 12 月

- 10) 堀江薫(2017)「『場』の語用論と文法の接点：日韓語のスピーチレベルの対比を通じて」
日本語用論学会第 20 回大会, 京都工芸繊維大学, 京都市, 12 月
- 11) 堀江薫 (2017)「英語における連体と連用の関係 - 日本語 (・韓国語) との対比を通じ
て - 」(招待講演)言語の類型論的特徴を捉える対照研究会第 6 回公開発表会, 大阪府立大
学なんば I-site キャンパス, 大阪市, 11 月
- 12)クロヤン・ルイザ・堀江薫(2017)「アルメニア語の不定詞による名詞修飾の機能—日本語
との対照を通して—」日本言語学会第 155 回大会, 立命館大学, 京都市, 11 月
- 13) 堀江薫(2017)「語用論と言語類型論の関係を「動的に(?)」再考する」(招待講演)
京都工芸繊維大学, 京都市, 10 月
- 14) クロヤン・ルイザ・堀江薫(2017)「アルメニア語と日本語の名詞修飾表現の対照 - 「外の関
係」の名詞修飾表現を中心に - 」「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」「名詞
修飾表現」班平成 29 年度第 2 回研究会, 富山大学五山キャンパス, 富山市 10 月
- 15) 堀江薫(2017)「日本語の名詞修飾表現と言語類型論」(招待講演)国立国語研究所
(NINJAL) Prosody and Grammar Festa 2 シンポジウム「日本語と言語類型論」, 国立
国語研究所, 立川市, 2 月
- 16) Horie, Kaoru (2017) “Language Contact, Linguistic Typology, and Cognitive Linguistics: A
Cognitive Typological Analysis of ‘see’ in English, Japanese, and Korean.” (招待講演) Hankoku
University of Foreign Studies, Seoul, Korea, 3 月
- 17) 堀江薫・ハイタリー(2016)「『内の関係』と『外の関係』の名詞修飾節の通言語的バリ
エーション: クメール語・日本語・英語を中心に」(招待講演)国立国語研究所機関拠
点型基幹研究プロジェクト「名詞修飾表現の対照研究」第 2 回研究会(招待講演), 名
古屋大学, 10 月
- 18) 堀江薫(2016)「日本語と韓国語の「主節」と「従属節」-言語類型論の観点から-」(招
待講演)第 250 回朝鮮語研究会 記念シンポジウム「言語学と朝鮮語」, 東京大学駒場
キャンパス, 9 月
- 19) 堀江薫(2016)「非従属節」の類型論—日本語・英語・韓国語・インドネシア語・フィ
ンランド語の事例に基づいて—」(招待講演)第 8 回 奈良女子大学文学部 欧米言語
文化学講演会 言語学, 奈良女子大学, 8 月
- 20) 堀江薫(2016)「日本語の名詞修飾節の「ウチ」と「ソト」-主節現象・主節化に関して」
(招待講演)国立国語研究所機関拠点型基幹研究プロジェクト「名詞修飾表現の対照
研究」第 1 回研究会(招待講演), 神戸大学, 7 月
- 21) 堀江薫 (2016)「非従属節」のタイポロジー -言語類型論研究と「言いさし」研究の
接点-」(招待講演)第 70 回 NINJAL (国立国語研究所)コロキウム, 国立国語研究所,
立川市, 6 月

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。